
かれとあたし。

ゆちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かれとあたし。

【Nコード】

N4301F

【作者名】

ゆちゃん

【あらすじ】

南家に届けられた手紙。それは懐かしくも、儚い同窓会の便りだった。

今のあたし。(前書き)

優しい旦那様と可愛い子ども
その2人に囲まれてあたしは幸せです。

今のあたし。

2008年も残り2ヶ月のある日
南家に1通の手紙が届いた。

「同窓会？」

「うん、年末にまた何でやるのかしら」

この物語の主人公は南あすか、24歳。
彼女の元に同窓会の手紙が来たのがきっかけ。

「しかもクリスマス前の平日かー」

「あなた忙しいでしょ？」

「んー・・・」

「だから断ろうかなって思ってるんだけど」

「友達とは結構会ってないんだっけ？」

「うん、結婚してからだから4年くらいは・・・」

20の時に結婚して、現在は4年目の主婦。
旦那さんは3歳年上の27歳。

商社マンの旦那さん。

そしてもう一人・・・。

「まーまあ」

「あかね連れて行っちゃったらさすがに迷惑かけちゃうからね」

彼女が同窓会参加を考えるのも無理はない。

南あかね。現在1歳と数ヶ月。

まだまだ小さいあかねを置いて同窓会参加は浮かばれるのだ。

「行つてきなよ」

「え？」

「久しぶりに羽伸ばしてきたら？」

「いいの？だつてあなた・・・」

「まだ2ヶ月弱あるから明日にでも休暇届けだしてみる」

「ありがとう」

旦那様はとても優しいです。

あすかが友達と4年も会ってないと知り

その日の為ならお休みをしようと決断した訳です。

翌日。

「あなたいつてらっしゃい」

「ああ行ってきます」

主婦の朝は忙しい。

朝8時少し前。

あすかは旦那様の送り出し。

それから掃除、洗濯、買い物、あかねと遊ぶなど。
彼女はいつも忙しいのだ。

「あかねー？」

「・・・」

「あら、寝ちゃってる」

遊びながら寝てしまったのか

あかねは小さく寝息を立ててしまっている。

掛け布団を持ってきて、そっとかけてやるとあかねは安心したような顔になった。

ふと家の電話が鳴る。

あすかはあかねの場を離れ、子機の近くに寄る。

「はい、南です・・・あ、はい・・・あ、巴？うん、元気よー」

メールや電話では連絡を取っていた学生時代の友人からの電話にあすかの顔もほころぶ。

「うん、今は家事やってた。もうめつきり主婦よ」

あかねの様子を見ながらも、電話の相手と話す。

「明日？それじゃあお昼一緒に食べない？何か作るわよ」

同窓会の話でもしない？と持ちかけられたあすかは

翌日のお昼からの約束を取り付け、電話を切る。

嬉しそうに台所へ行き、あすかはあかねのおやつを作り始めた。

同窓会の日は年末の忙しい時期。

12月22日のクリスマスイブ2日前。

残り2ヶ月のとある11月の日だった。

「今日のデザートはバナナケーキにしよう」

今のあたし。（後書き）

ども、ゆちゃんです。

ちよつと変わった感じの連載です。

詳しくはブログにて

<http://ameblo.jp/yuchan-kk/>

あの頃のあたし。(前書き)

親友との久々の再会。

嬉しくて嬉しくて嬉しくて、

でも少しだけ不安なのはどうしてだろう？

あの頃のあたし。

旦那様を送り出して

今日はいつもよりも早めに家事を済ますように努力する。

今朝のあすかはいつもとは少し違った。

「はい、あかね？足のばして？」

「あーあっ・・・うっ・・・」

お昼の少し前、あすかはあかねに靴下を履かせようとあくせくしていた。

自分もしつかりと準備を終えて、あかねをベビーカーに乗せる。

あかねは嬉しそうに笑っていた。

待ち合わせは11時半に駅前。

高校時代の友人が来てくれるので

お出迎えをしようという考えなのだ。

「あすか」

「・・・巴！」

山科巴はあたしの親友。

彼女は高校を卒業して美容師の専門学校へ行って

今は美容師をしてる。

会うのは本当久しぶりで

あたしはあかねがいるからそんなに外出は出来ないし、
巴も仕事が忙しかったみたい。

「すぐ作っちゃうからあかねの面倒見ててくれる？」

「ん、わかった」

家に着くとあかねは初めて見る来訪者に少しだけ人見知りしている
ようだった。

だけど、巴がいい人だってわかると嬉しそうに遊んでもらってた。

本日のお昼ご飯はカリカリ梅の和風パスタとあかね用にチーズオム
ライス。

あかねはこのオムライスが好きで出すと凄く喜んでくれる。

「本当まさかあすかがこんなに主婦になっちゃうとはねー」

「えー？そう？」

「だってあんた高校の時、料理も洗濯も何にも出来なかったじゃない」
「い」

「そんなことないよ？」

「だってあんた、調理実習でまっずい物作って先生困らせてたのに」

高校の時の懐かしい話たち。

食後は紅茶を飲みながら、更に話に花が咲く。

あかねはオムライスが美味しかったのか眠そうにしてたのでベット
に寝かせている。

「はい、アルバム」
「あ、ありがとー」

巴から言われていた卒業アルバム。
昨日の電話の後、あたしは卒業以来殆ど開いてない卒業アルバムを出すことにした。

「しかし何でまた年末なんだろうね」
「しかもクリスマス前よ？」
「みんなそれぞれ忙しい時期なはずなのに」
「何でも幹事は麻生なんだってね」
「あー麻生くんか、懐かしい」

ぺらぺらと卒業アルバムをめくる。
うちの高校は1学年4クラスあって、
人数もそんなに多くないからクラスが離れていても顔と名前を知っているなんてことはよくあった。
麻生蓮くんはうちのクラス4組のムードメーカーだった。
明るくて、気さくで、スポーツ万能で、友達思い。
勉強はあんまり出来なかったみたいだけど、みんなに好かれてた。

「あの麻生だもん、何でも今コックやってるらしいよ？」
「え、そうなの？だってスポーツ系の専門行ったんじゃない」
「何か怪我したんだって、んで全部嫌になって家出して何も持っていかなかったから道端で倒れたところあるお店のコックに見つけてもらった」

「それでそのまま？」
「うん、今はいっちょ前にチーフとかやってるらしい」

巴は高校の時から情報通だった。

誰と誰が付き合ってるとか、誰が告白した、とか。
先輩、同学年、後輩関係なく色々知ってた。

「忙しいんだって、でクリスマス前に休みが運よく取れたから集まろうって話になったって」

「へえー。でもみんな来れるのかな？」

「女たちは結構休み取れるみたいよ？男どもはどうかねー」

「懐かしいね、みんな元気かな」

「他のメンバーはたまーに会ってるからいいんだけどね。今回はあんたよ、あすか」

「え、あたし？」

巴はズいつとあたしを指差す。

カップをテーブルに置いて、巴は言った。

「結婚式もそんなに大勢人呼ばなかったじゃない？」

「まあね、高校の子達は10人くらいかな」

「結婚したこと知らないのもいるんじゃないの？」

「え、そうかな」

結婚式は親族だけで行っって話になって
でも誰か呼んでいいよって話になったので
10人ほど呼んだ。

「昨日麻生と電話で話したんだけど、あすかが来るの楽しみにしてたわよ」

「そうなの？」

「かなーり金垣と会うの楽しみ！って」

「まだ参加出来るかわかんないのにね」

「旦那忙しいの？」

「時期的にねー。一応届け出すって言ってたけど」

「いつそのこと旦那とあかねちゃん連れてきちゃえば？」

「うちの旦那結構な人見知りよ？」

「んじゃー無理だわ」

金垣というのはあたしの旧姓。

麻生くんは結婚式には呼んでないからきつと知らないのかも。

「あ、電話」

「旦那？」

「うん、ちょっと出るね」

電話に出ると旦那さんは少しだけ嬉しそうな声だった。
聞くこっちも嬉しくなる。

「休み取れた？うん、わかった。気をつけてね」

「取れたって？」

「うん、今月ほぼ休みなしだったからOK取れたって」

「これで参加出来るね」

「みんなに会えるの楽しみ」

ぺらぺらとアルバムをめくる。

クラスのページに行き着くと、巴の手が止まった。

「・・・あれから、藤崎くんとは？」

「・・・」

巴の手元。

黒髪の彼は微笑んでいた。

あたしはそれを見ながらただ首を振っていた。

「そ、だよね」

「もう、会うこともないっていうのが最後の言葉だもん」

「・・・同窓会来ると思う？」

「・・・来ないと思う。結構人見知りあったじゃない？」
「そだね」

泣きそうになったのを我慢して、

巴を見つめた。

察したのか巴は、アルバムを閉じた。

わかってた。

わかってたはずなのに。

まだ心のわだかまりは消えていない。

隠し続けていた、あの頃の気持ち。
誰もが抱いたことのある、その思い。

あの頃のあたしは毎日が楽しかった。
でも今は？

楽しいけど、無理してない？
ねえ、あたしは何がしたいの？

同窓会、その言葉が少しずつ現実味を帯びてくるのにそんなに時間はかからなかった。

あの頃のあたし。(後書き)

ども、ゆちゃんです。

少し遅くなりました。

少しずつ確信に迫っていきますよ！

詳しくはブログで

<http://ameblo.jp/yuchan-kk/>

開かれた扉。(前書き)

かれの名前を口に出す。
懐かしく、そして悲しい思い出。

開かれた扉。

巴がうちに来てから数日。

旦那さんの休暇も無事取れた事だし、
参加の手紙を送った。

辺りが暗くなってきた頃。

旦那さんの帰りを待っていると
携帯が鳴った。

「はい、もしもし」

『あ、麻生！』

「うん、登録してるから知ってる」

『さっき参加の手紙来たから嬉しくて電話しちゃった』

「あ、よかった。届いたのね」

麻生くんは今回の同窓会の幹事。

彼の電話番号は同窓会の案内に書いてあったから登録しておいた。

『それにしても、結婚してたんだな』

「うん、連絡しないでごめんね？」

『いや、いいんだ。みんなそれぞれ色々あるのは知ってるし』

「今コックさんやってるんだって？」

『そうなんだよー。これでもちよつとは偉いんだぜ？』

麻生くんはあの頃と殆ど変わっていないみたい。

あたしのまぶたにはあの頃と同じ笑顔が浮かんでいる。

『結構みんな参加出来るみたいでさ』
「あ、そうなんだ。今何人くらい？」

3年4組は全員で38人。
半分以上集まっていればいい方だと思うんだけど。

『んーとね今んとこ25人かな？』

「そんなに集まったんだ」

『そうなんだよー。俺も驚いてさ』

「もうちょっと少ないかと思った」

『まだ日にち自体は結構あるからまだ集まるかも』

「誰が来るって？」

何気なく聞いたつもりだった。

麻生くんはあのことも知ってるし

あたしはそのことを分かってたつもりだった。

『えっとー葛西だろ、青木だろ、あとはー』

「それ女子ばっかね」

『しょうがないだろー、丁度たまってたんだから』

「ふふ、そっか」

ガサガサと紙を持つ音が聞こえる。
名簿が何かなんだろう。

『男子はねー、宮野とか二ノ宮とかあと・・・』

「・・・珍しい、来なさそうだったのに」

『だよなー。あ』

「・・・ん？どうしたの？」

『なあ、金垣』

「ん？」

『藤崎参加出来ないって』

「・・・そ、つか」

心臓をドンって叩かれた気分だった。

一瞬息が出来なくなる。

喉が渴く。

『だから安心しろ、な？』

「うん、ありがと」

それから麻生くんとは少し話して
電話を切った。

嬉しいような悲しいような
そんな複雑な気分。

引っ張り出したアルバムを開いて、
クラスのページを見る。

黒髪のタレ目の彼

その微笑みは、いつでもあたしに向いていた。
その期間は短かったけど
気持ちの整理をしたはずだったのに
思い出すことなんてないと思っていたのに。

「藤崎くん……」

彼はあたしの初めて付き合った人だった。

開かれた扉。(後書き)

お久しぶりです、ゆちゃんです。
今回は割りと動き出す回でした。

これから動いていつてくれるとありがたい・・・w
詳しくはブログ

<http://ameblo.jp/yuchan-kk/>

出会い。(前書き)

忘れることが出来ない思い出。
その最初のページは、彼との出会い。

出会い。

藤崎くんとの出会いは
高校2年の春だった。

その日は少しだけ肌寒くて。
制服を着て、足早に学校に向かった。

「あすか！」

「巴、おはよ」

「おはよ、クラス分けどうだった？」

「3組だったよー」

「あたしも3組！今年も一緒じゃない、やったー！」

1年の頃からの友達の巴。

今年もまた一緒だって巴は凄く喜んでて
あたしもまた嬉しくなった。

「・・・自己紹介は各々やってもらうとして、委員会だな。んじや
代表からー」

クラスが変わった日。

2年3組には結構知った顔が揃った。

クラスが4組しかなかったっていうのもあったけど、
1年の時同じクラスだった人も多かった。

委員会が決まっていく学活の時間。

ばーっと窓の方を見ると、そこには小さくあくびをもらす人がいた。
知らない顔だな、それが第一印象。

残りの委員会は1つ。

あたしは特にやりたい訳でもないから、そのままばーっとしてた。

「女子決まんねえんだったらジャンケンでもしろ」

担任の一言で集められた女子数人。

みんなめんどくさそうな顔をして、ジャンケンを開始。

「・・・負けた」

「あすか、どんまい」

まさか負けるなんて思ってたないし。

あたしはしょうがなく、自分の名前を書く。

『 執行委員 男：藤崎八重 女：金垣あすか 』

藤崎くんて誰だろうと思った。

綺麗な字で、書かれたその名前に少しだけ興味が生まれた。

今学期最初の委員会はその日で、担任はサボるなよーと生徒に言っていた。場所を確認して、その教室に向かう。藤崎くんが誰か確認は取ってないけど、大丈夫だろうと足早に向かった。

「何年何組だ」
「2年3組です」
「そこだ、プリントに目を通しておきなさい」
「はい」

時間より少し早めに着いた。そこには教師が既にいて、あたしは大人しく言われた席に座る。隣りはまだ開いている。

「遅れました」
「何年何組だ？」

ドアの音がして後ろに振り返る。するとそこには、あのあくびをした黒髪の人がいた。

「・・・」
「・・・」

隣りの席に座る彼が”藤崎八重”
少しだけ緊張した。

委員会が始まって数分。

藤崎くんから紙が机に置かれた。

『藤崎八重です、自己紹介が遅れたけどよろしくね?』

短い言葉に何処か嬉しくて、あたしはその下にこう書いた。

『金垣あすかです、よろしくね』

藤崎くんは紙を受け取ると、小さく微笑んだ。

それが出会い。

なんて変哲もない、あたしと藤崎くんの出会いだった。

これから起こることが予想出来ていたら、

今のようには後悔をするなんてことは、きっとしていなかっただろうと思う。

出会い。(後書き)

どうも、ゆちゃんです。

回想編その1でございます。

まだ序盤ですけどねw

詳しくはブログ

<http://ameblo.jp/yuchan-kk/>

兄とあたし。(前書き)

暖かいそのぬくもり。

不安は募るばかり。

あたしはどうしたいの？

兄とあたし。

「ただいまー」

「・・・」

「あすか？」

「・・・あなた、おかえりなさい」

「どうかした？」

「え？」

「何かぼーつとしてたみたいけど」

「ちよつと疲れちゃって」

何をしてるんだろう、と思った。

卒業アルバムを片付けて、立ち上がる。

「ごめんなさい、夕食の準備してないわ・・・」

「そうだろうと思って買ってきた」

「本当ごめんなさい・・・」

「さつき携帯にかけたんだけど出なかったし、何かあったと思って」

スーパ－の袋を受け取り、中からお弁当を取り出す。

「ちよつと、考え事しちゃってて」

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫よ」

本当は違った。

何かいけないことをしているみたいなそんな感じ。
自分でも無理に笑ってるってことに気付いてた。

「今週末なんだけど、出張が入っちゃって」

「今週末？」

「ああ、金曜の夜からなんだけど・・・帰ってくるのは日曜夕方かな」

「また急ね？」

「俺も聞いたばかりで、何がなんだか」

そう少ししょぼくれる旦那さまを差し置いて、あたしは箸を進めた。

「それでさ、今結構危ないだろ？」

「そうね、結構事件多いし」

「それでちあきに来てもらうってのはどうだ？」

「ちあきに？」

ちあきというのは、あたしの双子の兄のこと。

旦那さまの会社の下請け会社で働いてる。

「帰りにたまたま会ったんで、話したらOKだって」

「うん、わかった」

「明日にでも連絡取ってみれば？」

「そうね」

その日、旦那さまが本当に優しくてあかねをお風呂にも入れてくれた。

久々にゆっくり休んでいいよって微笑んでくれて、何だか胸が痛かった。

翌日の昼頃。

お昼ご飯の片付けをしていた時、携帯が鳴った。

「ちあき」

『あすか、元気か？』

「うん、元気よ」

『雅人から話聞いてるだろ？』

「うん、あとで電話しようと思ってたの」

雅人というのは旦那さまのことで
ちあきは年上なのに呼び捨てにしている。
そこもちあきらしいんだけどね。

『んじゃ今日帰りにでも寄るわ』

「うん、わかった。ちあきの好きなハンバーグ作っておくわ」

『な、何でお前覚えてるんだよ』

「覚えてるわよ、家族でしょ？」

少しだけ陰った心が晴れた気がした。

ちあきはあたしの片割れ。

あの時も、そばにいてくれた。

「いやー寒くなっとな」

「そうねー、もう12月だし」

「今年ももうすぐ終わりかー」

「早いよね、本当」

雅人さんは少しだけ遅れると連絡があった。

ちあきは家に来て早々ご飯を平らげた。

「雅人が言ってたけど、最近元気ないんだって？」

「え、そうかな？」

「同窓会の連絡が来たって聞いたけど、まさか・・・」

首を振った。

でも、何だか不安で俯いてしまった。

「藤崎くんは来ないって連絡があったの。でも・・・」

「でも？」

「この間、巴が来たんだけど卒業アルバムと一緒に見て・・・」

「・・・それで？」

「思い出しちゃって、色々と・・・」

「・・・そうか」

手が震えてるのがわかった。

左手で右手を押さえる。

「ただいまー」

「！おかえりなさい・・・」

「おかえり、雅人」

「おい、ちあき。お前家の主人より偉そうとは何事だ」

雅人さんは疲れたのがすぐに着替えに行ってしまった。
ちあきは心配すんなって顔をしていたので安心した。

「え、何ちあき泊まってくの？」

「あれ言ってなかったっけ」

「今聞いた」

「俺明日休みなんだよ、だからいーかなって」

「んじゃ今日は飲もうぜ」

「雅人明日仕事は？」

「午後からなんだ」

「なら今日は3人で飲む？」

2人は少しだけ驚いた顔をしていたけど
今日は何だか飲みたい気分で

ワインやビールを冷蔵庫から出してきた。

酔いたい程に忘れたい記憶。

彼との出会いから、あたしの高校生活は色濃くなってゆく。
そしてその別れもまた・・・。

兄とあたし。(後書き)

3連投です、ゆちゃんです。
新キャラ登場の回。

適当に考えすぎたかなって思ってますが
これからも出せるといいなw
詳しくはブログ

<http://ameblo.jp/ychan-kk/>

お酒に飲まれる。(前書き)

ちあきは優しい兄だ。
かけがえのない存在。
だけど、甘えることって怖い。

お酒に飲まれる。

目が覚めるとそこはいつもの風景と少し違っていた。

「・・・」

頭が寝ぼけているのか

記憶を遡ろうとしても思い出せない。

「昨日は確か3人で飲みだして・・・」

それからどうしたんだっけ？

「雅人が最初に潰れて2人で飲みだして、あすかが潰れたのが朝方だよ」

右のほうから声が聞こえてそっちを向くとちあきがいた。
ヒラヒラと手を振っている。

「もうお昼!？」

「よく寝てたみたいだから起こさなかったよ」

「雅人さんは!？」

「1時間くらい前に出かけてった」

ご丁寧にご飯作っておいたみたいとちあきは続ける。

テーブルの上にはラップがかかったサンドイッチが置かれていた。
そばには手紙つき。

『ちあきがいるから、久々に羽伸ばすといい。』

本当最近は申し訳ないくらいに、優しい。
手紙を隠すように仕舞い、着替える。

「あかねちゃん、見ない間におつきくなったよなー」

「あー」

「ほら、俺おじちゃんだけどわかる？」

「う？」

リビングからそんな声が聞こえる。
嬉しくて思わず笑ってしまった。

「夕方まで俺いれるから、何処かで羽伸ばしてくれば？」

「え、いいの？」

「いつも、あかねちゃんの面倒とか家事とかで大変なんだから」
「ん、わかった。その変わり夕飯はうちで食べてって」

ちあきの提案を嬉しく受け取るとして、
あたしはいつもより綺麗な格好をして、出かけることにした。

「昨日あんな辛そうな顔されちゃあ、こっちだって話せないだろ」

ちあきのそんな言葉は知らなかったあたしは
のん気に、家を出て行った。

一人で外出するのはいつ振りだろう。

いつもあかねを連れているから、何だかそわそわしちゃうけど

ふと新しく出来た雑貨屋さんを見つけた。

何だか気になったので入ってみる。

その雑貨屋は『together』というなお店で。

「いらっしゃいませ」

小さな女の子が、微笑んでそう言っていた。

エプロンと名札をつけていることから店員さんなんだろう。

店内は明るくオレンジを基調とした感じで中はとても広い。
色々な雑貨が置いてあった。

絵を描くことが趣味となってるあたしは
色々揃えようと手にとってみる。

そういえば、あの時も・・・

そしてまた1つ、扉が開かれる。

お酒に飲まれる。(後書き)

ゆちゃんです、こんばんわ。

翌日の話なのに時間が開いてしまい申し訳ないです。

ここからまた回想編になります。

詳しくはブログ

<http://ameblo.jp/yuchan-kk/>

夏休み。（前書き）

夏休みは忙しい。

委員会だけじゃなくて

さらに増えることになる。

夏休み。

「金垣さんて絵描くの好きなの？」

「え、な、なんで？」

「この間美術の先生にほめられてたの見たんだけど、凄い嬉しそうだったし」

「・・・いや、うん、まあ」

委員会が一緒になってからというもの、あたしと藤崎くんとはよく話すようになった。

「今度何か見せてよ」

「ええ、あたし下手だから駄目だよ」

「そんなことないって、実は凄い絵うまいって知ってるんだから」

そうやって微笑まれると、あたしは頷かずにはいられない。

藤崎くんとあたしの関係は不思議なものだった。

高2の夏休み。

美術の先生に呼ばれたあたしは学校に来ていた。

文化祭で行う展示会の絵を描いてみないか？ということだった。勿論頼まれることは名誉なことだし、

何より何を描いてもいいというのが嬉しかった。

それから家にいる間は絵を描くことになった。

「あつつ・・・」

8月頭のとある日。

文化祭の会議ということで生徒会と執行委員が集められた。

夏休みの宿題と絵を描くことしかしてないあたしにとって久々の外出。

「おはよー」

「何か焼けたねー」

「そうそう、この間さー」

と委員会の中でもそれなりに仲が良い子同士は話をしている。

あたしはちょっとだけダルイ身体を起こし、ぼーっとしていた。

「久しぶり、金垣さん」

「・・・藤崎くん、久しぶり」

藤崎くんは爽やかに隣りに腰掛ける。

「夏休みももう半ばだねー」

「そうだねー。何してた？」

「これから旅行行くんだよ」

「旅行いいなー」

教師が来るにはまだ時間があるから

そんな風に話を進める。

「今日おっきい荷物持ってたでしょ？」

「うん、今も後ろにあるよー」

藤崎くんと一緒に後ろを向くと

あたしが持ってきた画用紙と画板、画材などが入った袋が置いてある。

「文化祭の展示会で飾る絵を描いてて」

「結構忙しいの？」

「うん、ここ最近は家にこもってた」

「あとで見せてよ」

「ええ、まだ途中だよ？」

「うん、それでいいの」

そう言ってもまだ藤崎くんはその袋を見ていた。

あたしはそれが何だか恥ずかしくてあたしは前を向いた。

委員会は昼前に終わり、

あたしと藤崎くんは昼と一緒に食べることにした。

場所は美術室で、だけど。

そついうのもいいよね、なんて2人で笑った。

「出来上がってないけど、本当にいいの？」

「うん、それが見たい」

「何か恥ずかしいな」

紙を差し出すと、丁寧にそれを見る。

藤崎くんはいつもの優しい目じゃなくて
何処か鋭い目だった。

「秋らしくていいと思う」

「・・・ありがとう」

心の底からホッとした。

別にほめてほしいとかそんなんじゃなかったけど
でも凄くドキドキして、嬉しかった。

お昼を食べ終わった後も藤崎くんはあたしが絵を描くのを見ていた。

「あーだめだ、また使い切っちゃった」

「ん？」

「パステル、そろそろ無くなりそうだと思ってたら丁度切れちゃった」

「あ、本当だ」

パステルの茶色を使い切ってしまった。
帰りにでも買いに行かなくちゃ。

「いつもそういう画材って何処で買ってるの？」

「地元駅前にある画材屋さん」

「へえ」

「小さいお店なんだけど、色々売ってるの。帰りに寄ってかなくちや」

「・・・」

夕方になり、帰ることにした。

藤崎くんとは駅まで一緒。

「ねえ、金垣さん」

「ん？」

「その画材屋さん俺も行つてみたいな」

「え」

「ちょっと興味があつて、駄目かな」

ほらまたその顔。

額かずにはいられない。

そして一緒に画材屋に向かうことになった。

何でかわからないけど、緊張して仕方なかった。

その時から、藤崎くんと帰りを一緒にすることが多くなった。

藤崎くんは興味があるからって画材屋に一緒に行くことが多かった。
あたしはあたしで買い物をするから、それでもいいんだけど

でも、曖昧な関係の方が居心地がいいって
気付くのはもう少しかかることにあたしはまだ気付いてなかった。

夏休み。（後書き）

ゆちゃんです。

回想編スタートです。

ここから長いですよーw

詳しくはブログ

<http://ameblo.jp/yuchan-kk/>

大きくなる存在。 (前書き)

夏休みが開けた。

忙しいけど、頑張らなきゃ。

大きくなる存在。

夏休みが明けて9月。

文化祭まで2週間と時間がない中、学校では執行委員で文化祭準備。家では展示会に飾る絵の制作。

「・・・眠い」

「あすか、クマひどいわよー？」

「寝てないからね」

「最近睡眠時間どれくらい？」

「平均2時間くらい」

毎日遅くまで学校に残っていて、そして帰ってから絵を描かなきゃいけない。そんなのがここ数日ずっと続いている。

「ほら文化祭が終わるまでの辛抱だから」

「そうだけど、無理しないでね？」

「うん、わかってる」

巴が凄い心配してくれてる。

その分がんばらなきゃって思っちゃう。

「あれ・・・？」

「おはよう、金垣さん」

「・・・藤崎くん？」

「うん、おはよう」

ふと気付くと、藤崎くんが隣りで本を読んでいた。
あたしは起き上がり、辺りを見回す。

「放課後になっても起きなかったから、山科さん準備行っちゃったよ」

「そか・・・ごめんね、わざわざ」

「うっん、金垣さん疲れてるみたいだから」

本をパタンと閉じて、あたしに向き直る。

藤崎くんは何処か心配そうだった。

「準備行こっか」

「・・・」

「藤崎くん？」

「・・・金垣さん無理しちゃ駄目だよ」

藤崎くんはあたしの肩にポンと手を置く。
心配そうなそんな複雑な顔。

「だ、大丈夫だよ」

「無理してるって顔してる、寝れてないんでしょ？」

「今やらなきゃいけないの、委員会だって絵だって大事だし」

「・・・だけでもうちよつと自分を大切にしなきゃ」

「・・・」

何でそこまで藤崎くんが言うのかわからなかった。
腕を掴まれてしまったので、行くに行けないし。

「何で」

「え？」

「何で藤崎くんはそこまであたしに言うの？」

放課後の教室に2人だけ。

まだ蝉の声が聞こえる9月。

しばらくの無言。

「俺が心配なんだ」

「え……」

「俺が心配っていうのは、理由にならない？」

頭の中にハテナマークが浮かぶ。

え？え？と混乱しだす。

それから気まぎれになって、藤崎くんが手を離す。
しばらくドキドキが収まらなかった。

絵の完成は文化祭の4日前だった。

先生は本当にありがとうと言ってくれた。

それだけで嬉しくて、頑張ってたって思った。

あの日以来、何だか藤崎くんとはギクシャクしてしまって
話しづらかった。

委員会で顔合わせても、気まずい感じ。

「このままじゃいけないって思うんだけどなあ」

理由はわからないけど、そんな気がする。

あたしの中で藤崎くんという存在が大きくなり始めていることに
気付くことなく文化祭当日を迎える。

大きくなる存在。（後書き）

ゆちゃんです。

ちよつと距離が縮まったかなーw

まだまだ続きます。

詳しくはブログ

<http://ameblo.jp/yuchan-kk/>

かれの言葉。
(前書き)

文化祭当日。

ドキドキの中展示会へ向かう。

かれの言葉。

文化祭当日、執行委員会の仕事は無いに等しかった。

前日まで忙しかったから、何だか暇な気がして仕方なかった。

2年3組は、お化け屋敷。

巴とは時間が違うから、

あたしは兄のちあきが来るまで一人で時間をつぶすことにしていた。

向かう先は美術室で行われてる展示会。

前日はクラスの準備と展示会の準備と結構忙しかった。

展示するスペースやメッセージボードなんかの飾りつけも

結構みんな真剣にやっていたので人が集まってると思うんだけど。

二スと絵の具とそんな色んなにのいの混ざった美術室。

あたしはここが好き。

展示会は美術部や美術の成績がいい生徒が参加している。

あたしはそこまで成績もよくないはずなんだね。

「金垣さん」

「先生」

先生は手招きをして、あたしを呼んだ。

美術室には何人も人がいて、驚いた。

「金垣さんの絵たくさんが見に来られてるのよ」

「え、そうなんですか？」

「ええ、みんな必ず足を止めていかれるの」

先生と話をしながら、自分の展示スペースに向かう。
何だかドキドキしてくる。

「ほら」

「・・・」

あたしの展示スペースには、何人もの人がいた。
絵とメッセージボード、飾りつけ。
忙しい中作ったから、適当になってる部分も多い。

「みなさん、彼女が金垣あすかです」

「・・・」

その場にいた人がみんなあたしを見る。
視線が痛くて思わず下を向いた。

「・・・大丈夫」

声が聞こえた。

たった一言『大丈夫』と。

「金垣さんのことをいじめる為に見てるんじゃないから、大丈夫」

声の主はそう言って、遠ざかって行った。

見なくてもわかる。

声の主は藤崎くんだって。

「みなさん、足を止めてくださってありがとうございます」

あたしは前を見つめて、声を出す。

視線は痛かった、でも怖くない。

「展示会に参加することは初めてだし、描くのは本当に大変でした。でも、みなさんが見てくださって、頑張ってよかったって心の底から思いました。」

泣きそうになった。

鼻がツーンとする。

あたしが描いたのは女の子がベッドの上で本を読んでいる所。
読書の秋っていう安易なものだけど
本当よかったって思う。

文化祭初日はそんな1日だった。

睡眠時間短くても良かったって思った。

「藤崎くんにお礼言い忘れた！」

帰りに思いついたあたしは2日目にちゃんと言おうと思った。

藤崎くんの存在が大きくなってる。

そんなことに少しだけ胸が高鳴っていた。

かれの言葉。（後書き）

ゆちゃんです。

緊張してる時って、

どんな時でも嬉しいと思うんです。

詳しくはブログ

<http://ameblo.jp/yuchan-kk/>

大切なもの。(前書き)

文化祭2日目。

そして終わりを迎える。

大切なもの。

2日目は特に問題もなく終わりを迎える。
この数ヶ月忙しかった分、寂しい気がする。

後夜祭に参加したかったんだけど
委員会の仕事があつて参加は出来なかった。

「藤崎くん、昨日はありがとう」
「ん？ああ、気にしないでいいよ」
「一応お礼だけ」

2人で片づけをしながら会話をする。
こつこつという機会もなくなると思うと寂しい。

「金垣さん誕生日来週なんだって？」
「あ、うん。誰から聞いたの？」
「山科さんが教えてくれたんだよ」
「巴め」

片づけを終えて、席に座る。
外では花火があがってる。

「綺麗だね」
「うん」
「金垣さん」

「ん？」

窓から藤崎くんの方に顔を向けると
薄明かりの中で藤崎くんの顔が見える。

「これ」

「何これ・・・」

「少し早いけど誕生日プレゼント」

綺麗にピンクで包装された少し大きめ。
それを渡される。

「開けてもいい？」

「どうぞ」

丁寧に開けようとしたけど、手が震えた。

「・・・水彩絵の具？」

「うん、水彩買いたいって言ってたから」

「・・・ありがとう」

涙が零れた。

ただ本当に嬉しくて。

藤崎くんは泣くことないのにつて言ってたけど
本当に心の底から嬉しかったんだ。

「・・・お客様？」

「・・・」

「お客様、大丈夫ですか？」

「あ、大丈夫ですよ」

少し思い出し過ぎたかも。

そう自嘲気味に笑った。

可愛い店員さんが心配そうに見つめてる。

「このお店いいお店ですね」

「ありがとうございます。色々な画材に囲まれて楽しいです」

本当に好きなんだなってわかるくらいの笑顔。

あたしはパステルを取って店員さんに渡す。

「ピンクの包装とがありますか？」

前向きになりたい。

そんな風に思った。

文化祭でもらった水彩絵の具。

あれはまだ家にあっただはず。

家に帰ると、昼寝をしているちあきとあかねがいた。

微笑ましい光景に微笑んで、夕飯の準備を開始することにした。

「もうすぐ12月・・・」

同窓会まで1ヶ月を切ろうとしていた。

大切なもの。（後書き）

ゆちゃんです。

長々とありがとうございます。

回想は一応ここまでです。

読んでくださってありがとうございます。

詳しくはブログ

<http://ameblo.jp/yuchan-kk/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4301f/>

かれとあたし。

2010年10月10日01時52分発行